

## 2016年度第4回日本語教育研修会報告（台北：2017年2月11日、高雄：2月12日）

国際交流基金日本語国際センター  
専任講師 大船ちさと

テーマ：人間的成長を支える日本語教育について考えよう

私は2001年に中国の中学校用の日本語教科書を開発するプロジェクトに参加して以来、現在まで15年以上、教材開発に携わり続けています。そのうち、2014年までは海外の中等教育機関における日本語教育が私のフィールドでした。日本語教育の多様化がずいぶんと進んでいますが、中等教育段階における日本語教育も、社会の変化に伴い、求められることが大きく変わってきています。この社会の変化の激しい今、中等教育段階に限らず教育に携わる私たち教師は、何を目的として教育活動に取り組むのかを今一度、ふり返る必要があるのではないかと感じています。

私自身、この大きなテーマに対して、しっかりとした答えを持っているわけではありません。試行錯誤の連続です。だからこそ、このようなテーマでお話しをしたいと考えました。

以下に簡単ではありますが、研修会の流れと概要をまとめます。

### 1. 社会の変化と自分の教育の変化

まず、近くに座っている2～3人でアイスブレイクも兼ねて、最近10年間に自分自身の生活がどの程度変化したかを、次の観点からふり返り、思いついたことをワークシートに書き出してもらいました。

- ・コミュニケーションツールの変化
- ・情報収集の変化
- ・移動距離の変化
- ・学び方・働き方

その上で、次の10年の変化を、テクノロジー、学び方・働き方、環境、ヒト・モノの移動といった点から予測してもらいました。どのグループも、この10年間で大きく社会の様子、自分自身の生活が変わったことを挙げていて、今後も大きく社会が変化していくのではないかといい予測をしていました。ここで講師から質問を投げかけました。

「みなさんの教育方法は、この10年間でどのくらい変化しましたか」

### 2. 「キー・コンピテンシー」・「21世紀型スキル」と教育動向

現在の学校制度、公教育制度は産業革命の時代に生まれたといわれています。当時は工場での大量生産が始まり、同じ知識、技術をもち労働にあたることのできる人材が大量に必要でした。そこで、もっとも効率よく大量に人材を排出できるよう、学年別、能力別にクラスを分け、知識を分化して教育するシステムを作り、学習者は教師から知識、技術を学ぶというスタイルが採られるようになったのです。このシステムが作られた時代から大きく社会は変わりました。今、教

育は変わらなければならないときを迎えているといえます。

近年、「キー・コンピテンシー」(ライチェン・サルガニク 2006)、「21世紀型スキル」(グリフィン・マクゴー・ケア 2014)という言葉が耳にすることが増えているかと思えます。これらの資質・能力は学校を卒業する際に成績優秀者だった人が必ずしも社会において、あるいは個人個人の人生において活躍しているわけではないということが発端で研究が始まったものです。時代は変わり、何を知っているかが重要だった時代から、目まぐるしく変わる状況・環境をとらえ、知識・情報を入手・活用し、ヒトとつながり、何かを生み出す力が必要とされる時代になってきているのです。世界の多くの国が教育制度改革に取り組んでいます。育成すべき能力観が大きく変化してきていることが共通しています。

私たちの学生は、5年後、10年後に社会に出て行きます。教育実践を行う際には、5年後、10年後の社会を想定し、その時代を生きる人に必要となるであろう資質・能力の育成を視野に入れることが重要です。そこで、再び2~3人でグループを作り、自分の学生に身につけてほしい資質・能力について話し合う時間を持ちました。ここでは、人との関係を作る力、自分自身の考えを表現する力、状況を把握する力、折れない心、あきらめない精神など、様々な意見が出ました。

講師からは再び、質問を投げかけました。

「みなさんは授業のデザインをするとき、これらの資質・能力の向上を意識していますか」

### 3. 世界の日本語教師の実践紹介

休憩を挟み、その後は世界の中等教育の実践の中から、2で紹介したような資質・能力観の育成を目指した事例をいくつか紹介しました。最初に紹介したのは、2016年9月にインドネシア・バリ島で開催された「日本語教育国際研究大会」の中等教育に関するシンポジウムの内容です。そのシンポジウムでは、アメリカ、インドネシア、オーストラリア、韓国、タイ(50音順)の高校教師による実践報告が行われたのですが、その中からタイとインドネシアの事例を紹介しました。

インドネシアでは2013年から新しいカリキュラムとなり、そのカリキュラムに基づいた教科書が開発されています。その教科書の試行版を用いた授業の様子をビデオで紹介しました。インタビュー調査の結果をグラフにまとめる活動が行われているのですが、その過程でグラフの作り方やグラフで正しく結果を伝える方法についても学んでいます。このように、日本語のクラスであっても、他教科で学ぶ内容と連携させていくことが行われている事例でした。

タイの事例は、高校3年生を対象に行われたプロジェクトワークです。障がいをもつ人のために役立つ機械・ガジェット・サービスを考えることを目的としたプロジェクトでした。関節に新聞紙を巻いて歩きにくい状態で歩いてみたり、目隠しして歩いてみたりして障がいを持つ人の生活を体験したり、障がいを持つ日本の人の生活を取り上げたタイのテレビ番組を視聴したり、インターネット上の記事を探したりという活動を通して、課題を抽出し、その解決策を考えてプレゼンするという内容です。

また、講師自身が開発に携わった教材開発の事例として、中国・大連市の教育学院と協働し

て開発した『好朋友 - ともだち - 』（以下、『好朋友』）とフィリピンの『enTree - Halina! Be a NIHONGOJIN - 』（以下、『enTree』）という教材について紹介しました。

『好朋友』は、「人間関係の温暖化」と「多文化共生」をコンセプトとして掲げた教科書で、教科書の冒頭にはストーリー漫画が連載されています。この教科書は全5巻のシリーズなのですが、学習項目や学習活動のデザインの軸にキー・コンピテンシーを活用しました。キー・コンピテンシーは、3つのカテゴリーのそれぞれに3つずつの項目が並んでいて、それだけでは抽象的で教育実践に応用する方法がわかりづらいので、中学生の生活の文脈に落とし込んで細分化していく作業に取り組みました。それを学習内容の選定やバランスなどを検討する際の指標として活用しました。

『enTree』では、開発に着手する前に、まずフィリピン人の教材開発メンバーがフィリピンの社会問題について話し合うことから始めました。そこから、これからのフィリピンを担う若者に身につけてほしい力は何かというディスカッションを進め、教材のコンセプトを決めていきました。授業の目標は、母語や英語で達成する大きな目標があり、その目標を達成する過程で日本語を学ぶというデザインになっています。教科書はなく、古雑誌にワークシートを貼り付けて生徒が自分自身の教科書を作るスタイル、授業をふり返るジャーナルの記録や日本語の目標の達成度を測る Can-do チェックはどの程度できるのかという部分を自分の言葉で記録するなど、工夫した点と生徒の成長の様子を紹介しました。

#### 4. ふり返り

最後に、今回紹介した世界の日本語教育実践の特徴をふり返りながら、2で自分が書いた目標の達成のために使えそうなアイデアがないか、個人でふり返る時間を持ちました。その後、質疑応答の時間を持ちました。

質疑の時間には、「どのように評価を行っているのか」、「台湾でも教育改革が行われていて、『核心素養』という能力観が示されており、各教科・学年ごとの目標を制定し、動き出している」、「こういった新しい資質・能力観は言葉だけが独り歩きしてしまい形骸化しがちだと感じている」といった話のほか、「紹介された事例はきれいごとばかりのように感じる。こういった授業を実施していても、将来、異なる意見の中で合意形成をしていく力がついていくとは思えない」といった批判的な意見が出ました。こういった批判的な意見が出たことは講師としてはうれしく、こういった意見が種になり、どのような実践を目指すべきなのか、語学の点だけでなく、資質・能力を育成するという観点からの中等・高等教育のアーティキュレーションの議論が深まっていくのではないかと感じました。私自身、もっと腰をすえて台湾の先生たちと議論したいという気持ちになりました。

大きなテーマを掲げた研修会になりましたが、こういった大きなテーマは、自分はどのように捉え解釈するかという視点で吟味することで、初めて自分事になるように感じています。今回の研修会を通して、少しでもみなさんにとっての「自分事」になったようであれば幸いです。

注) 参考文献は配布資料を参照。